

ハンガリーで思ったこと——

極右団体の襲撃にあった家の再建プロジェクトに参加して

白根 大輔 (IMADRジュネーブ事務所)

5月22日から25日までハンガリーに行ってきた。目的は現地である一人のロマ女性の家を建てる建築プロジェクト（ワークキャンプ）に参加すること。ジュネーブでの仕事のためたった3日間しか滞在できなかったが今後につながる経験、つなげたい出会い、そしてこれからいろいろやっていける、進めていこうと思う初めの一步が踏み出せたと思う。

抬頭する極右勢力とロマへの襲撃

ハンガリーでは近年極右政党の勢力が増し、同時に極右組織による「ロマ」をスケープゴート、ターゲットにした人種主義的扇動、暴力・迫害行為も増えている。2008年以降、現在まで把握できているものだけで計11の殺人、15の襲撃事件が報告されている。今年の3月初めには極右政党ジョビック（Jobbik）がブダペスト北東90キロにある村ジェンジェシュパタ（Gyöngyöspata）で反ロマ行進を行い、それに続き3つの極右団体が「自警団」なるものを形成した。この自警団がそれ以降、ロマの人びとが住む村で「パトロール」を継続している。また4月のイースターをまたいで「防衛団」（Védero）という極右団体自警団がジェンジェシュパタで「訓練キャンプ」を組織し、村には再び多くの極右の人びとが集結した。これを通し村に住むロマの人びとの間にも不安と緊張が高まり、一時ロマの女性と子どもたちは集団で村を避難した。その後4月26日には、極右団体と現地のロマの人びとの間の衝突も起きている。ハンガリー政府からはこのような一連の出来事にも関わらず、ロマの人びとに対する差別や偏見、人種主義的暴力や迫害を止めるための具体的な施策は取られていないし、上記のような極右団体を効果的に取り締まる様子も未だ見られない。

ワークキャンプの背景になった事件は、ブダペストから南南東へ60キロほどいったところにある村で起きた。2009年2月23日、その村に住むロマ女性、イルディさん（仮名）の家を複数人間が襲撃、彼らは

家の水道の元栓を閉め、家の中で水が使えないようにした上で火炎瓶を投げ込んだ。燃え上がる家から外へ逃げ出したイルディさんの夫、息子さん、娘さんを襲撃者はさらに銃で撃った。夫と息子がなくなり、家は残骸のみとなり、イルディさんと娘が残された。2009年8月、イルディさん一家襲撃を含め1年半の間に合計9つの襲撃と6つの殺人に関与したとされる4人が逮捕された。訴訟は継続中である。

ワークキャンプに

ワークキャンプはこのイルディさんの両親が住む村にイルディさんと娘さんのための新たな家を建てるというもの。土地や資材購入等の必要な費用は主に現地のNGOやドイツシンティ・ロマ中央委員会（以下中央委員会）を通じた寄付でまかなわれ、現地でのコーディネートはプラリペ（Phralipe）というNGOによって行われた。ワークキャンプ中の実際の建築作業はイルディさんの両親と親せき、中央委員会とバウオーデン（Bauorden）というワークキャンプNGOからのボランティアで進められた。家を建てるプロジェクトと言ったが、今回はその第一段階、2週間かけて家の基礎を作る。私はジュネーブでの仕事上最初の2日半しか参加ができず、途中で帰る形になったが、他のボランティアたちは6月3日まで現地に泊まり込み作業を続ける。

夫・息子を殺されたイルディさんとその家族



5月22日にブダペストに計7人のボランティアが集合した。中央委員会からは私がいつも連絡をとっているホイスさんが参加、ドイツから2人、ポルトガルから1人、ブルガリアから2人のボランティアが来ており、その日は全員プラリペのアグネスさんの家に泊まった。このグループに私は最後に合流し、アグネスさんは「7人目の侍」が来たと迎えてくれた。

◆一日目、5月23日朝にみんなで村へ向かう。イルディさんと彼女の両親や親せきと現場で合流、簡単な自己紹介の後、早速仕事に取りかかる、つもりだったが設計を担当した技師の到着が遅れており、まずはみんなで彼を待った。テニスコートよりちょっと大きいくらいの空き地には木製の簡易トイレ以外まだ何もない。20分ほどして技師が到着、作業にとりかかる。まずは設計図を基に家（まだ何も建っていないけれど）を取り囲む形で地面に杭を打っていく。その杭に今度は地面から10~20センチほどの高さに水平に細めの角材を打ち付ける。さらにそこに家の骨組みの構造にあわせ紐を張っていく。これらは大体1時間ほどで終了した。そこから一日目のメインワーク、家の基礎の溝掘りが始まった。骨組みの構造にあわせて張られた紐を目安に幅50センチ、深さ90センチから1メートル20センチの溝、日差しがとても強く風邪がまったく吹いていない日だったので、すぐに汗だくになった。午後2時頃、簡単な昼食休憩、イルディさんのお父さんが鶏肉をあげたもの、酢漬け野菜、パプリカとパンを差し入れてくれみんなで分け合って食べる。ボラン

ティアたちはドイツ語と英語、イルディさん一家はハンガリー語、現場監督のヤノシュさんはドイツ語を少し話す、アグネスさんは英語とハンガリー語。建築に関わる大事なところは何度も確認しながら通訳してもらう。それ以外はみんな身振り手振りを使って直接コミュニケーション。お互いの話している言葉はわからなくても一緒に作業をしたり休憩したり、飯を食べたりする中でお互いの意思や言いたいことが通じ合う時がある。この日は午後5時半頃作業を終えた。大体70%ほどの溝が掘り終わった。普段パソコンで仕事をしている手には豆ができてつぶれた。作業の後、イルディさんの両親の家でみんなで夕食をごちそうになる。ちょっとした予定変更があり、この日もブダペストのアグネスさん宅に泊まる。

◆二日目、その日の作業を早々から開始するため朝6時起床、ボランティア7人で軽めの朝食をとる。村に向かう準備を整え終えたところでアグネスさんから朝食の準備ができたと声がかかった。みんな「あれ?」と思いながら、まあいいか、という雰囲気ですぐ目の朝食をごちそうになる。朝からかなり腹いっぱいになった。朝食の後から出発までアグネスさんと彼女の活動について少し話をした。この日アグネスさんは作業現場に行かないためそこまで詳しく話をする時間がなかったが、あとでいろいろ資料をくれると言う。ただ、草の根ではなかなか英語での情報収集・記録ができないとも言っていた。政権が代わってからNGOに対しての資金提供が激減したため財政もどんどん困難になっている。

これから作業開始



出発の時間になったためアグネスさんにありがとうを言い名刺交換をして村に向かう。現場について一人が声を上げた。何かと思ってみんなで見に行くと昨日掘った溝の側面一部分が幅2メートルほど陥落していた。文句を言っても元に戻らないので、それぞれさっさと軍手をはめスコップを持って作業に取り掛かった。1時ごろまででほぼ溝掘りが終了、みんなで気持ちよく昼休みに入る。今日

もイルディさんのお父さんが家に招いてくれた。みんなでがつがつとご飯を食べ、食後は家の軒先で全員が横並びに座り食後の一服。午後現場に戻ると、また溝の側面が陥落、今度は同時に3か所崩れていた。作業を二手に分け、一組は溝の修復、もう一組はその溝にセメントを入れるときに一緒にはめ込む鉄筋作り。3時過ぎには溝掘りがほぼ終了したため、全員で鉄筋造りに入る。ここから作業は順調に進み5時前にはこの日のすべての工程が終了した。今日からは現場近くの小屋に泊まれるのでまずはそこに荷物を置いた後、買い出しに行った。小屋の外の芝生の上でボランティア7人でパン、サラミ、チーズときゅうりとビールの夕食をとる。みんな疲れていたためか9時過ぎには就寝。4人が小屋の床に寝袋、2人は気持ちいいからとそのまま芝生の上で寝袋、もう一人は車の中で寝た。

◆三日目、この日は溝にセメントを流し込んでいく作業、ただセメントが10時頃に運ばれてくる予定のため、朝はボランティア7人ゆっくりと起き、ラーツケヴェのパン屋でパンとコーヒーを買い、ドナウ川沿いでピクニックのような朝食をとってから現場へ向かった。セメントが来るまでまだ時間があったため、前もって溝に石を入れていく。そこにイルディさんのいとこのユスフさん(仮名)が遅れて到着、彼は昨晚お父さんになった。みんなが子どもが生まれたお祝を言う。抱き合って喜ぶ。そこにセメントが到着したので4組に分かれて作業をはじめた。小石を入れる班、鉄筋をはめ込んでいく班、セメントを流し込む班、流し込んだセメントを整えていく班。2台目のセメント車のセメントがなくなったところで午前中は作業が終了した。お昼を再びイルディさんの両親の家でごちそうになる。いつの間にかボランティアのみんなが「おいしい」と「ありがとう」をハンガリー語で言えるようになっていた。

昼食後現場に戻る。もう空港へ向かわなければならぬ時間になっていたため、午後の作業が始まって30分がたったところで他のみんなに一人ひとりお別れを言った。ちょうどブダペストで用事のあったホイスさんに空港まで車で送ってもらう。その中でこれから何をやるべきか、一緒に何ができるか少し話

した。自分はなにができるだろうと考えているうち、あつという間に飛行機の時間が来てジュネーブに着いていた。

一つひとつをつなげる

お金を出せる人が出ず、諸々の手配をできる人がする、参加したい人が建築作業に従事する、それぞれがつながり自分のできることを通して貢献する。そして一軒の家が建つ。

家が一軒できたところでイルディさんたちの傷が癒されるわけでもないかもしれない。ハンガリーや他の国のロマの人々の状況が変わるわけでもないだろう。極右の人たちが暴力をやめるわけでもないし、差別がなくなるわけでもない。それでも建った家にはこれからイルディさんと娘さんが住むことができる。そこから次の一步を踏み出していくことができる。またワークキャンプを通して人が出会った。ここで出会った人たちがこれからつながり、さらなる家を建てていくことができる。その家からさらに多くの次の一步が踏み出されるかもしれない。

今回私がハンガリーに行って何か大きな変化が生まれたわけではないけれど、イルディさんの家の基礎作りには自分が掘った穴の分だけ貢献できたと思う。問題は大きくて複雑かもしれない、自分ひとりが何かをしたところで何も変わらないと思う時もある。でも自分にできることがある、自分にできなくとも彼や彼女にできることがある、一人では無理でもみんなでできることがある。それぞれの一步一步が小さくとも、それがつながったらいつか大きな道になるのではないかと考えている。小さな変化がつながったらどでかい変化が生まれるのではなからうか。時間はかかるかもしれないけれど、そんな小さな一つひとつをつなげるため、今自分にできることを一個一個やっていきたいと思う。

6月5日にまたハンガリーに行く。中央委員会とIMADRの共同でジェンジェシュパタの件について村とブダペストで調査をする。これに合わせ他の村や人も訪れる予定で、現在ホイスさんとアグネスさんが調整している。ラーツケヴェにもまた行く予定だ。そのころまでには家の壁ができあがっているはずだ。

(しらねだいすけ)